

幼稚園生活の中での

自分のもの、みんなのもの

伊集院 理子

昨年度、久しぶりに三歳児を担当した。家庭から外の世界に踏み出して、同年代の子どもたちと初めて生活を共にする子どもたち、集団生活ということでは何色にも染まっていない真っ白な子どもたち。その子どもたちと共に、どういう生活を紡ぎ出していくか、担任として大きな責任を感じつつも、毎日

心をときめかせながら過ごした一年であった。たとえれば、雪が降った朝に早起きして、新雪の雪に一步自分の足跡を刻んでいく時の、あの何とも言えぬ新鮮で心が弾む感覚だろうか。自分のちよつとした関わりが、子どもの中の心にくつきりと形を残していく感じで、その手応えに心躍らせながらも、

そうだからこそ、保育者としての自己満足、自分自身の達成感にのみ陥らないように、子どもたちと共にといいことを、肝に銘じて過ごしてきたつもりである。

そんな思いを持ちながら、一年間、心から子どもたちとの生活を乐しみながら、考えてきたことがいくつもある。その中の一つが、幼稚園生活の中でのものの位置づけに関わることである。

一人一人のドレス

担任した子どもたちは、特に女兒はイメージが豊かで、どんどん自分たちで遊びを作っていける子どもたちであった。ままごとコーナーには、色々な布が置いてあり自由に使えるようになっていた。

ある時、女の子たちがありあわせの布を腰にまいて洗濯挟みでとめて、それですっかりドレスを着たお姫様になりきって過ごしている姿を見て、子ども

の発想の豊かさ、柔らかさに目をみはる思いがした。

三学期のある日、ご馳走を作ってパーティーをしようという話もちあがっていた。それをどうにかして盛り上げたいと思った私は、ありあわせの布でお姫様になりきれぬ子どもの柔らかさを潰してしまうことになるかもしれないと危惧しながらも、パーティーごっこが華やかに盛り上がるには、もう少し子どもにとって魅力的なものが必要なのではないかと考えた。そこで、カラビニール袋を出して、「これでドレスを作るのはいかがしら」と提案してみた。子どもたちは飛びついてきて、あつというまにほとんど全員の女兒にその日のうちにドレスを作ることになった。

出上ががったドレスを身につけて、子どもたちは、テープから流れる音楽に合わせて、舞踏会のイメージで踊りに興じたり、食事をする席も設けら

れ、すましてごちそうを食べたりしていた。

そのドレスは、自宅に持って帰っても次の日にはまた幼稚園に持ってきてもらって、個人が所有するものとして、使いたくなくなった時に、自分の引き出しの中から個々がひっぱり出して、大事に使うものとして位置づけていった。これまでも子どもたちの要望に応じて、色々なものを色々な素材で作ってきたが、このような形で、同じ物をみんなが自分持ちのものとして持つことは初めての体験であった。色の違いこそあれ、お友だちと同じ物を持って、それ自身につけ、自分の大事なものとして繰り返して使うという体験は、子どもたちにとって、とても嬉しいこと、大きな意味のあることであった。それから数日間、ドレスを持ち出して着てみたり、脱いでみたりと、一日に何度となく着脱を繰り返かえてドレスを着ることを楽しんでいた。

ちようちよごつこの遊び

ドレスも少し治まってきた頃、年長女兒数名が三歳児の保育室に来て、ピアノを弾いたり、鈴、トライアングルなどを演奏したりして、出前音楽会をしてくれた。せっかく年長児がよい刺激を与えてくれたので、しまつてあつた楽器を持ち出して、「大きい組さんみたいに音楽会をしよう」と子どもたちに持ちかけてみた。すると、子どもたちはすぐに「やる、やる」と乗ってきた。私がひくピアノに合わせて飛んだり跳ねたりして踊ることは大好きな遊



びの一つで、一学期から繰り返しやってきた。ピアノに合わせて音楽会をするのもよかったが、せっかく初めて取り組む音楽会ごっこなのだから、これまでとは違って、子どもがすつと親しめるようなクラシックのテープにあわせてやるのはどうか、ふと思った。それでテープを探してみると、「おもちゃ

のシンフォニー」と「ちようちよ変奏曲」が一緒にはいっているテープが見つかった。それを流して、私も子どもたちと一緒に楽器を演奏する役になって、音楽会ごっこを始めた。テープを巻きもどして最初から繰り返してやっているうちに、子どもたちの中から「ちようちよからがいい」という声が出てきた。そこで、「ちようちよ変奏曲」だけを何回も繰り返して、その曲に合わせて楽器を演奏した。

次の日も、「ちようちよしたい」というので、そんなに「ちようちよ」がいいなら、もっとその遊びがおもしろくなる手だてはないかと考え、黄色のカ

ラービニール袋で蝶の羽を作って、それを背中につけて演奏するようにしてみた。私としては、音楽会の彩りぐらいにしか思っていなかったのだが、蝶の羽をつけると、楽器を演奏することよりも動いてみたくなって、子どもたちは楽器を置いて、ちようちよになってはばたき出した。

この「ちようちよ変奏曲」というのは、元気よく飛んだり、羽を休めてじつと静かにとまったり、更に勢いよく飛んだりと、音楽の調子に合わせて自然に動きの変化をつけたくなるようにうまく構成されている。子どもたちは、このちようちよごっこに夢中になっていった。「わたしも、ちようちよになりたい」と何人も言ってきた、私は急いで黄色い羽をいくつか作った。その羽をつけて、子どもたちは嬉々として音楽に合わせて飛び回った。

その日、「ちようちよの羽をうちに持って帰りたい」という声もあがったが、私は、その時、この蝶

の羽は個人の持ち物にたくない、この遊びに属するもの、みんなのものとして位置づけたい、と感じた。それで、「またちようちよごっこをする時にすぐ使えるように、これはここに置いておきましょう」と子どもたちに持ちかけた。すると、案外すんなり子どもたちは納得して、羽をその場所に置いてくれた。

次の日、子どもたちは朝来るなり「ちようちよする」と言つて、数人が一斉にちようちよになりたがつた。そこで、咄嗟に、ちようちよだけでなく一つ役があるかと思つて、「花の精も出てくるといいんじゃないかしら」と持ちかけ、子どもたちが魅力を感じそうなピンク色のうすがみで花の冠を作つてみた。すると、「花の精になりたい」という声が続々上がり、花の冠づくりに追われることになった。蝶の羽と花の冠をそれぞれ五、六個ずつ作つて、それ以上は作らないようにした。

その時やりたいと思つた子どもたちが集まって、置き場所から変身グッズを取つて、花の精やちようちよになったり、その役を交代したり、メンバーが入れ替わつたりしながら、この遊びを楽しむようになっていった。蝶の羽も花の冠も、個人に属するものとしていたら、遊びの展開はこのようにはいかなかったと思われる。

その後、「お遊戯室の舞台の上でしたい」という声があがり、それぞれちようちよや花の精の身仕度をして、テープを持ってぞろぞろと遊戯室まで遠征して、遊戯室の舞台でこの遊びを楽しむようになった。

年中児に進級してから

三歳からの持ち上りのメンバーに加え、男女あわせて十五名の新メンバーが加わり、年中の新学期がスタートした。最初のうちは、新メンバーの一人

一人と少しでも早い段階でどうやったらいい関係を結んでいけるか、ということ、私の頭はいっぱいであつた。一週間ちよつとして、少しずつ生活のペースがつかめるようになった時に、三歳からの子どもたちから「ちようちよしたい」という声があつた。大事に蝶の羽も花の冠も取つて置いてあつた。旧メンバーにとつては慣れ親しんできた遊びを、この新学期の段階で出すことは、新メンバーにとつてどうなのか、一瞬迷つた。しかし、この遊びは、誰でもやりたい人がやりたい時に共有財産の変身グッズを身につけて参加できる遊びとしてクラスの中に位置づいていたのだから、新メンバーを迎えずぐであつても、新メンバーをも仲間に取り込んできつと展開していつてくれるだろう、と私は思つた。そこで、「先生、大事に大事に取つておいたからね」といつて、蝶の羽と花の冠を出してみた。すると、ぱつと蝶の羽をつけて、三歳からの人たちが

音楽に合わせて飛び回り始めた。その様子をびつくりしたように見ていた新入の人たちに、「これをつけて一緒にやってみない」と誘つて、私も花の冠を頭につけて、その子たちにも花の冠をかぶせてあげて、遊びの輪の中に飛び込んだ。手のひらを花の形にしてゆらゆら揺らして花の精の役を演じている私の傍らで、初めのうち、新入児は呆然として周りの様子をみているだけであつた。しかし、だんだんこの遊びの楽しさが伝わつてきて、私の真似をして花の精を演じるようになっていつた。新入児の中でも積極的な人は、花の精よりちようちよの方がおもしろそうと感じ取り、ちやつかりちようちよの役と代わつていつた。そうなると、「わたしもちようちよがいい」といつて声があがつてきた。新入児の人たちもやりたい役ができるように、急いで蝶の羽をいくつか追加して作つて、新入の人たちもちようちよになれるようにいつた。

花の冠から思いついたのか、新人園児の一人が「ドレスを作りたい」と言いだした。その要求にも応えてあげたいとも思ったが、分身の術が使えたらどんなにいいかと思う忙しさの新学期、ここでドレスを作り出したら次々「作って」となるのは目に見えていた。そこで布でできているドレスがあつたので、「こんなのあるけど、どうかしら」と投げかけてみたが、イメージが違ったようでそれはそのままになってしまった。

保育後、ドレスを作つてという子どもの要求に応えきれなかったことが、気になった。それと、なんとなく三歳からの人たちが勢力的に蝶の役をとってしまう状況が今後も予想されたので、花の精の役をもつと魅力的なものにして、二つの役が同等の魅力をもつたものにする事で、選択の幅を広げられるようにした方が良くように思われた。そこで、花の精のドレスを作ることを思いついた。保育

者が、子どもの目の前で、作ることに意味もとても大きいとは思うが、その時間を保育中に取る余裕はないので、あらかじめ作っておくことにした。その際、子ども自身が保育者の手を煩わせずに自分たちで着脱ができるもので、花の冠とセットになるものにしようと考え、冠の花の色と同じピンク色のビニール袋でウエストをゴム仕立てにした短めのスカートで冠の数だけ作っておいた。

次の日、ドレスを作つて欲しいといつていた新人の人に、「こういうの作つただけかどうかしら」と持ちかけると、イメージにあつたようで、スカー



トと冠をすぐに身に着けた。それを見て、「わたしも」と次々言ってきたも、あらかじめ準備をしていたので、その要望にすぐに対応することができた。その日は、魅力的になった花の精の役が人気を集めたが、動きの変化ということでは、蝶の役も捨て難く、両方の役があまりかたよることなく、この遊びを新旧入り交じって楽しんでいった。

それから、大体毎日、他の遊びをしていたかと思ふと、誰かが変身して、それを見て数人変身して、変身しただけで状況を共有しあえて、それだけで意気投合して楽しんでる姿がみられた。友だちと同じものを身につけて音楽に合わせて体を動かす体験は、慣れない環境で緊張していた新人の人たちの心と体をほぐすことにもつながっていった。

このように振り返ってみてみると、同じビニール袋で作ったものであったが、位置づけが違っていた

ことがわかる。最初のドレスは、幼稚園生活の中で大事に使う自分のものを持つ、という意味があった。お友だちと同じようなものでも、それは他のものとは全く違うたった一つしかない自分のものなのである。そういう自分のものを持つということも、幼稚園生活の中ではとても大切なことであろう。しかし、全て幼稚園の中で作ったものが個人に属するものとしての位置づけしかなかったとしたら、たまた一つの自分の大事なものとしての意味がどんどん薄れ、所有欲のみがいたずらに増大していくだけになってしまったかもしれない。

時期をそう違えずに、双方とも保育者の方から持ちかけ同じ素材で作ったものであったが、その遊びにとつてももの持つ意味の度合い、遊びの展開の可能性を、保育者として直感的に感じ取って、前者は個人に属するもの、後者は遊びに属するものとして位置づけた。

これまでも、年長を担任していた時など、みんなで作ったもの、保育者が作ったものが、例えば劇遊び用のものといったように、遊びに属するものとして位置づくことはよくあった。

それに比べ、年少の場合は、自分の意識の中で、個々の要求に応えるということがまず先行して、物を作っても、あまり意識することなく個に属するものとしての位置づけをしてきたように思う。今回、自分の中でひらめきのように、作ったものをちよちよごっこに属するものとして位置づけたいという思いが湧きあがり、その思いをそのまま子どもに働きかけてみた。そうしたら、あっさりその位置づけがみんなに受け入れられ、前述したように、ちよちよごっこの遊びは次々と発展していった。遊びの発展過程を熟考してみても、あの時の直感は間違っていないかったと確信する。

とはいえ、ものが何でも遊びに属するもの、みんなのものになっちゃったなら、自分のものを工夫して作ろうという製作意欲や自分にとってかけがえないものとして大事にする心などを育てていくことは難しいだろう。個人もちの大事なものを体験した後だったから、みんなのものがすっと受け入れられたのかもしれない。

幼稚園の毎日の生活の中で、子どもたちには、自分のものもみんなのものもどちらも必要なのだろう。保育者としての自分の直感、子どもたちの反応をしっかりと見すえながら、さらにももの位置づけについて意識して過ごしていきたいと思っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)